久里子は、伝声管を開けて、舞台の進捗を気にかけていた。次に歌う場面が一番の見せ場だ。そう思うと、此までの舞台生活で他に類を見ない程極度に緊張してきてしまった。不安が襲う。胸が押し潰され、呼吸も儘ならない。動揺が不安を煽っていく。

自分は関谷男爵の娘と言われているが、父の記憶など全くなかった。世の中は自分を「華族の令嬢」と祭り上げる。由緒ある令嬢にレビューは似合わぬ。ソプラノ歌手はぴったりだと。しかし、自分には男爵家の令嬢として培った品位は微塵も無い。夜露を凌ぐため必死に街頭で歌う艶歌師が父であり、愛嬌あるお多福顔の乳母が母であった。二人は我が子同然に自分を育ててくれたのだ。生まれがどうあれ、私は市井の人間。この様な場所に居ること、それだけでさえ、不安で仕方ないのだ。

「あぁ、私が身の程を知っていれば…。背伸びしているのよ。到底、及びもしない世界に。」

出番までまだ二十分はある。不安は大きくなるばかり。何時になく困惑した彼女の耳にそれは静かに入り込んできた。

「久里子…。」

ふと、名を呼ばれた気がして辺りを見回すが、人の気配はない。しばしの間を置いて声は再び囁く。

「久里子…落ち着くんだ。」

確かに、この部屋内に誰かがいる。辺りを警戒しつつ、

「貴方は誰？」強い語気で問う。

「心配はいらぬ。訳あって名乗れぬが君の味方だ。今夜、どうしても伝えなければならない忠告があって来た。時間がない、良く聞くのだ。」

久里子は、不安に駆られながらも男の声に聞き入った。

「この後お前は独唱するが、その前に何かを飲むのかね。」
「グ、グラスの葡萄酒…。いいえ。お芝居ですから本当はお水を。」
「その水に、毒がいれられようとしている。絶対に飲んではいかん。声門が閉じて声が出なくなるぞ。」
「えっ、毒が！一体誰がそんな恐ろしいことを。」
「何れ分かる。良いかね、私も努力はするが、毒物の混入を止めきれんかもしれぬ。だから、飲まないでくれ。」
「貴方は何方？ なぜそのようなことを仰るのです？」
「詮索好きな女子の本能を、今は捨ててくれ。成功を納めて欲しいのだ。くれぐれも口に含むなよ。」
声はそれだけ伝えるとふっと止んでしまった。久里子は立ち上がり辺りを見て回る。物影や物入れ。ひとが隠れそうな場所は全て確認した。不思議だ。まるで、この部屋内にいる人間の話し声のようであった。しかし、幽霊や化け物とは違う。話が妙に現実的である。事実久里子は、

彼女の成功を妬む一部の者達から酷い陰口を叩かれている。知らず知らずに人の恨みを買うことを悲しんでいた。しかし、今「声」が言ったことは陰口の域を越えた犯罪だ。本番中の今、これ以上の不安や動揺を迎え入れる許容力はない。落ち着かねば。伝声管を伝わるコーラスガール達の声に集中し、楽屋係の呼び出しを待たず久里子は一人舞台へ向かった。

舞台袖に待ち構えていた人々は、早すぎる歌姫の待機に若干驚いていた。本来ならばまだ楽屋にいてよい時間。道具係りや、楽屋係の女たちは久里子の青ざめた顔を見て、「これしきで上がるようじゃ、所詮帝都座で主役を張れる玉じゃない」と、嘲笑った。久里子の尋常ではない様子に驚いた富岡教授は直ぐにやって来て、優しく声をかけた。

「どうしたね？ こんなところで上がる君ではなかろう？」久里子の長く美しい睫毛は憂いを漂わせ辺りを見回す。そして、富岡教授の耳元で囁いた。

「匿名の警告を受けました。私に毒を飲ませようとしている者がいると…。」

興行の世界で暮らす者に取って、妬みからの嫌がらせは付き物であった。教授は冷静に久里子を落ち着かせた。

「成程、気丈な君が真っ青になるのも当然だ。しかし、時間がない。わしは犯人を探す、君は何も口に含むな。良いかい？ 兎に角歌うのだ。毒を飲まなければ君は無事なのだから。急場は避けられる。この場合、警告に感謝しなけりゃ。君にとっては味方がいる証拠じゃないか。」

久里子は力強い富岡の言葉に頷き、舞台の展開を目で追い始めた。

教授は辺りを警戒した。愈々舞踏会の場が始まる。子爵役の穴戸利三郎がやって来た。教授に励まされた久里子は、利三郎にエスコートされ上手の舞台装置入り口へと登っていった。弟子を送り出した後、富岡教授は、舞台袖や後方を行き交う裏方に注意を向けた。そも、シャンパングラスの小道具は、何時、誰が用意するのか。道具のことまでは把握しかねる。すぐ教授は給仕の格好をした役者を探した。そして、下手に控える大部屋の一人に、給仕の仕度をした役者を見つけたのである。大先生に凝視されているとも知らずに、役者はコームで髪を整え始めた。『彼がシャンパングラスを持ったなら、飛んでいって、中身を皆捨ててやる…。』教授は機会を伺った。ところが、困ったことに給仕が三人に増えてしまったのだ。櫛を入れていた男優の元に、別の二人の男優が近寄ってきて、何やら小声で話始めた。

教授が冷や汗をかいている一方で、楽屋係の女は手筈通り、小道具係の目を盗んでシャンパングラスに薬液を混入した。主犯は久里子にグラスを渡す、給仕役の男優であった。楽屋係に頼み、小道具に毒を仕込ませたのである。これで久里子が服毒した場合、真っ先に疑われるのは小道具方となる。まもなく主役の出番だ。久里子と利三郎は、出のタイミングを計り始めた。しかし、その緊張を破るかのようにそれは突然起きた。客席に影響を及ぼさないまでも、それは正しく事件であった。

オーケストラボックスの古賀西條音楽監督は舞台裏から響いた、物を取り落とす甲高い雑音に驚いた。何か非常事態が起きたのかと、神経を尖らせる。指揮者の注意が削げると、楽団にも動揺が広がってしまう。特に今は、第一バイオリンの人事異動があったばかりで、団の状況が不安定。古賀監督は雑音が一時的な物であると即断し、指揮を続けた。

雑音の原因はこうである。間もなく舞台へ出る関谷と穴戸に舞台上で手渡される予定であったシャンパングラスを、得体の知れない黒覆面の人物が床に叩きつけ破壊したのである。そしてその人物は、何故か楽屋係の女に掴みかかり、女が失神するほど鳩尾を殴ったのだ。

余りに突然の出来事。ガラスの飛び散る激しい音に舞台裏全ての人間が凍りついた。覆面の男は、上手上方で胸に手を当て怯える久里子に向かって、舞台へ出るよう手で合図した。結局、謎の人物はグラスを叩き割り、女を失神させると疾風のように逃げ去った。途中、追っ手に腕を掴まれたがそれを払いのけ、劇場のどこかへと姿をくらましてしまった。今の出来事に舞台裏は騒然となったが、関谷嬢だけは違った。シャンパングラスの呪縛から解放された彼女は、

「さ、参りましょう。お水がなくなっただけです。」

と、利三郎を促し普段通り舞台へ出た。暫くすると見事な歌い出しが聞こえてきた。

富岡教授は、上手袖へやって来て、散らばったグラスの内容液に花紙を浸し、液を吸いとった。支配人の指示で、失神した楽屋係は医務室へ担がれていった。

「教授。残念ながら今夜は、久里子嬢の歌声に酔いしれる間さえなさそうです。いやはや頭痛がしますよ、先ずは警察だ。」

目を白黒させて支配人が現場を去る。裏方はもとの通りに動き始め、舞台は滞りなく進んでい

く。多くの者が、久里子の歌声に恍惚としている。そんな中、富岡教授は怪人が逃げ去った方向へ歩き出した。彼は一体何者であったのか。久里子を魔の手から救ったのは事実である。やり方は過激だが悪意ある人間ではあるまい。それにしても、こんなに入り組んだ舞台裏から良くも逃げおおせたものだ。教授は、久里子の言葉を思いだし、女優楽屋の隣にある楽団控室を怪しんだ。ドアノブに手をかけたが、その部屋は施錠されていて開かない。教授は久里子の楽屋へ立ちよった。部屋内は勿論誰も居らず、鏡だけが整然と並んでいた。伝声管からは愛弟子の歌声。辺りを見回すが人が隠れられそうな余地はなかった。

「不思議なことも有るものだ。一体何者だ？ まさかオペラの、いや、ここは帝都座だった。帝都座の怪人か。」教授は一人ごとを呟いた後で「まさかな、アハハハハ。」と自分の言葉のバカバカしさに笑いだしてしまった。

　まさにその時である。笑い声に反応して、人の足音が隣室から聞こえたのである。施錠され、誰もいないはずの隣室から人の気配。教授は真顔になり、楽屋を飛び出すと、楽団控室のドアを静かに叩いた。

「おい、誰か居るのかね？ 久里子に忠告したのは君か？ 咎めはせん。寧ろ感謝している。」
内側で、静まり返っていた人の気配がドアに近寄りだした。カチャッと錠の外れる音がしたので、教授はドアを開け中に入った。
楽団控室は電気も消えて真っ暗だった。中庭に面した窓から外灯の光が僅かに射し込む。
「ドアの鍵を、閉めろ。」
謎の人物が威圧的に命令する。